
バカと居眠りとAクラス

nature

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと居眠りとAクラス

【Nコード】

N7700Y

【作者名】

n a t u r e

【あらすじ】

学園居眠り時間歴代最高記録を1年で塗り替えた男「緑野 魁人」。

その男がなんで学年次席？！

幼馴染の佐藤美穂、親友の明久、雄二らと繰り広げる学園ラブコメデー！

どうぞお楽しみ下さい！……楽しませられるかなあww

Aクラス中心でやってくつもりなのでFクラスはあまりだせないかも…。

初投稿なので変かもしれませんがよろしくです！
作者は受験生なので更新は不定期です。
加えて作者の自己満小説になる可能性があります。
嫌だ！って人はお戻り下さい。。

ぶろろーぐ（前書き）

はじめまして。 natureです。

初投稿になります。 どうぞよろしくお願いします。

ぶろろーぐ。

春。 ここ文月学園ではクラス発表が行われていた。

「ふわぁゝ……。…眠いなぁ……。」

万年居眠り男「緑野 魁人」は大欠伸をしながら学園内を歩いていく。

「…先生を無視してどこへ行く。自分のクラスが知りたくないのか？」

生徒から「鉄人」と呼ばれ恐れられる補修教師、西村が血管を浮き上がらせながら言う。

「…おはようっす。」

「明らかに嫌な顔をするな。ほら、振り分け試験の結果だ。」

魁人は封筒を受け取り、空けようとする。

「実は、先生はお前を１年間見てきて「こいつは吉井と並ぶFクラス候補なんじゃないか？」

と思っていた。授業は居眠りテストも真面目に受けてなかったかな。」

やっと封筒を開け終わり中身を見る。

「緑野 魁人 Aクラス 次席」

「どうやら先生が間違っていたらしい。すまなかったな。」

「いや、悪いのは俺の生活態度ですから。謝んなくていいですよ。じゃ、俺行きますね。」

「ああ。出来れば居眠りはもうやめろよ」「無理っす。」「…即答か。」

「じゃ、残り頑張ってください。」

そう言って魁人は昇降口へ向かった。

これから魁人のAクラスでの学園生活が始まる……。

ぶろろーぐ。(後書き)

記入してありますが、更新は不定期です。

ご了承下さい。

主人公紹介！

名前 緑野 魁人（みどりの かいと）

性別 男

身長 175 cm

体重 62 kg

見た目 顔は中性的。ってかどっちかという女子。

だがなぜか女子に見られることはない。

髪は愛子を少し長くした感じの茶髪。

体型はちょっとやせてるかな？ぐらい。

性格 基本優しい。でも眠気によって機嫌が悪くなっていく。

眠いときに誰かに寝るのを邪魔されるとブチ切れる。

友達や弱い人をいじめる奴は大嫌い。そのときもブチ切れる。

また、かなり面倒くさがり。でもやる時はやる。

やっていいことと悪いことの区別をしっかりとつけている。

得意教科 数学（真面目にやれば1年の時毎回余裕で1位をとれたぐらい）

苦手教科 英語（勉強する意味がないと感じているから）

召喚獣 そのまま小さくした感じ。

服は剣道の胴着、袴。

武器は竹刀。特別な効果があり、

基本どこを打つてもダメージは低いが、
面、小手、胴、突きの位置（頭、両手、腹、喉）を的確に
打つと

相手の元々の点数の半分のダメージを与える。
つまり、2回の確に打つたら相手は補習行き。

腕輪 もう決めてありますが、秘密です。

A対Fが終わった辺りで更新するつもりです。

その他 中学まで剣道をやっていた。同じく中学で剣道を

やっていた（という設定）の須川と知り合い。

何回か試合をしたこともある。

しかし、足に重大な怪我をしたため、

今は文月の剣道部のコーチを氣が向いたらしている。

美穂とは保育園からの付き合い。

明久は小学校、雄二は中学校で出会った。

雄二と初めて会ったときに…？

自分以外への恋心には敏感だが、自分がもてると思ってい
ないため、

自分に関してはかなり鈍感。

1人暮らしのため家事は大体できる。

どうせ食うならうまいものが食べたい、という理由で

料理は異常にうまい。

居眠り時間学園歴代最長記録をもっているが、頻繁に更新
されるので、

正確な記録はわからない。

第1話 設備で重視すること。

「そういえば、あいつはこのクラスになったかな…」

魁人はAクラスへあるきながらそう呟いた。

「おつ、ここか…でかいな。」

入ったAクラスには教育施設とは呼べないくらいの設備が揃っていた。

リクライニングシート、個人エアコン、冷蔵庫、パソコンetc…。

「あつ、魁人くん！」

誰かが魁人に気づいたらしく、走って駆け寄ってきた。

「ん？お、美穂か。お前もAクラスに入れたんだな。」

走ってきたのは先ほどの「あいつ」こと幼馴染の「佐藤 美穂」だった。

「はい。魁人くんと同じクラスになりたくて、頑張って勉強しましたから…。」

「へえ、そいつは殊勝なこったな。ま、1年よろしくな。」

魁人は前半部分の意味を理解していないようでそう答えると、

「はい…。そういえば、この教室って大きいですね…。」

少ししよげている美穂は教室を見渡しつつ、こう言った。

「ああ、そうだな。」

普通の人ならばここで「勉強しやすそう」とか「快適そうだな」とか言いそうだが、それに対して魁人は

「寝やすそうだ。」

「…教室に関しての感想がそれですか…。」

学園居眠り時間歴代最高記録男はそう答えた。

そ か れ ら 少 し 経 つ て

「皆さん、席について下さい。」

クラス担当の高橋が教室に入り、そう告げる。

「ん？時間か。」

そうは言っても席に座って話していたので動くことは無い。

ちなみに魁人は偶然席が近かった美穂と話していた。

「そうみたいです…。」

「では、自己紹介をしようと思います。廊下側の人から願います。」

「あつちからか…。」

ちなみに魁人の席は窓側から2番目なので、結構後半の方になる。

「…自分の番まで寝てるから、順番が来たら起こしてくれるか？」

「はあ…、仕方ないですね。」

魁人は美穂にそう告げ、3秒で寝る。

「…人くん。魁人くん。次ですよ。」

「…ん？そうか。ありがとな。」

魁人は寝ぼけ眼をこすりながら笑顔でそう言う。

「いえ…／＼／。」

美穂は少し顔を赤くし、前を向く。

美穂の席は魁人の右隣である。

「さて…、俺の番か。まあ、対して特別なこともないか…。」

前の人が終わわり、魁人は立ち上がる。

「俺は緑野 魁人。好きなことは寝ることだな。1年間よろしく。」

魁人はそう皆に告げるとすぐ席に座る。

「俺の番も終わったし、また寝るか…。」

そうしてまた魁人は眠りについた。

「…何であいつが…？」

クラスメート達がそう呟き始めた頃にはもう寝息を立てていた。

第1話 設備で重視すること。（後書き）

いきなりコメントがきて驚きました…。

餓鬼さん、本当にありがとうございました！

感想など書いて頂けると作者は気が狂う程喜びます。

今回見て下さった皆様、出来れば次回も読んで頂けるとありがたいです。

感想、アドバイスなどお待ちしています。

では、読んでいただき、ありがとうございました！

第2話 代表さん達と顔合わせ！（前書き）

ちよつと1話1話の文字数が少ないかな？ってこの頃思っています。

第2話 代表さん達と顔合わせ！

「…ん？自己紹介、終わったのか…。」

全員の自己紹介が終わり、5分ぐらい経って、魁人は起きた。

「……ちよつといい？」

「ん？いいけど…あんたは？」

「……私は霧島 翔子。学年次席ってあなたで合ってる？」

このクラスの代表であり、学年主席である「霧島 翔子」が魁人に確認をとる。

「一応、そうらしいな。霧島さんが主席？」

「……そう。でも、あなたが次席になるとは思わなかった。」

「ま、日頃の生活態度はいいとは言えないし、テストも適当だったからな。」

魁人も確認をとり、翔子は肯定する。

翔子もまさか魁人が次席になるとは思わなかったらしく、驚いている様子。

「まあ、1年間、よろしく。」

「……よろしく。」

魁人が自己紹介のときと同じことを言うと、翔子は目的を果たしたらしく、自分の席に戻っていった。

「へえ、キミが次席なんだ。ボクはてっきり次席は久保くんだと思ってたよ。」

「僕も、次席はもらったと思ってたけどね。まだ、甘かったみたいだ。」

「…あんたらは？」

今度はボーイッシュな感じの女子と、眼鏡をかけた知的な男子が魁人に声をかけてきた。

「ボクは工藤 愛子。ヨロシクね。」

「僕は久保 利光だ。よろしく頼む。」

「ああ。緑野 魁人だ。よろしくな。」

魁人は「工藤 愛子」と「久保 利光」と自己紹介をすませる。

「ホントは優子もつれてこようと思ったんだけど…。」

「今は自習したいらしいね。」

「真面目だな。そいつは。」

愛子は「木下 優子」もつれてきたかった、というが、自習をしたい、と断られたらしい。

「まあ、いきなり自己紹介から寝てる緑野くんからしたら皆真面目かもね。」

「…嫌味か？」

「そんなことはないけど。ただ、結構有名だよ？緑野くん。」

「そうなのか？」

愛子はいたずらっぽく魁人に言うとしょろ顔をしめて答える。

そして、魁人は結構有名だという。

「魁人君は知らないのかい？」

「何をだ？」

久保も知っているらしく魁人に言う。

「魁人君は、1年で学園居眠り時間歴代最高記録を塗り替えたって有名なんだ。」

「…なるほどな。」

「だから、その魁人くんがなんでAクラスに入れるのかって、皆不思議みたい。魁人くんの自己紹介の後、皆ちよつとそれで騒いだけど…。」

「俺は自己紹介が終わったあとまたすぐ寝たからな。」

久保は魁人が有名な理由を話し、愛子が、魁人の自己紹介のあとざわついたのはそのせいだと言う。

「まあ、今次席になってるってことは十分な実力があるってことだね。」

「そうだろうね。まずは緑野君を目標にやらせてもらおうよ。」

「はは、まあ頑張ってくれ。じゃあ、俺はちよつと廊下に出てくるわ。」

「うん、行ってらっしゃい。」

愛子と久保が魁人の実力を評価すると、魁人は少し微笑みつつ返し、廊下に出てくるという。

「ああ、行つてきます。」

「ん？あれは…。」

魁人は知った顔を見つけたらしく、声をかけようとする。

「おい、明久、雄二！」

「ん？」

「あ、魁人君！」

魁人は親友、「吉井 明久」と「坂本 雄二」を見つけ、近付く。

「よう。お前はどのクラスになったんだ？」

「てつきり僕らと一緒にと思ってたけど。」

雄二が何クラスになったか聞くと、明久は魁人の実力を知らないため、同じFクラスだと思った、という。

「おいおい、おまえらと一緒にするなよ。」

「で、どこなんだ？」

「Aだ。次席になった。立派なもんだろう？」

「へえ〜。…ってAで次席?! うそお?!」

魁人がA、学年次席というと明久は飛び上がりばかりに驚く。

「やっぱりな。1年のころからおかしいと思ってたんだよ、お前があの成績なのはな。」

雄二は予想がついていたのか、あまり驚かない。

「へえ、お前にはお見通しだったってわけか。」

「そういうことだ。…おっと、先生が戻ってきたみたいだ、俺らは戻るぞ。」

「ああ、じゃあな。」

「またね。」

FクラスはまだHRが終わってないらしく、2人は教室に戻っていった。

「…で、なんであの先生は机を持ってきてんだ？…まさかな。」

魁人はFクラスの担任らしき先生が、机を持ってきているのを不審に思ったが、まさかそこまでボロくないだろう、と思い「机がもう壊れたから」という考えを頭から消した。

「…さて、そろそろ戻るか。」

そう言っつて魁人は新校舎、そして教室へと戻っていった。

第2話 代表さん達と顔合わせ！（後書き）

魁人はなんとなく散歩で旧校舎まで行っていました。

またコメントを頂きました！

紫苑さん、本当にありがとうございました！

第3話 自習って寝るための時間でしょ？（前書き）

明日期末テストです。

え？勉強？ 何ソレおいしいん（殴

第3話 自習って寝るための時間でしょ？

「はあ？自習？初日からか？」

「そうみたいです。なんでもFクラスがDクラスに試召戦争をしかけた、とかで…。」

魁人が教室に戻ると、美穂が今日は自習だと言ったらしく、驚いた様子で言う。

「雄二…いきなりか…。」

「どうしたんですか？」

「いや、ちょっとな…。」

（あいつのことだからな…。A前のちょっとした仕掛けってどこか…。）

魁人は理由に心当たりがあるらしく、雄二の名前を呟く。

「まあ、自習なら堂々と寝れるしな…。」

「…魁人くん、自習は寝る時間じゃありませんよ…。」

自習だと分かったら魁人はすぐに居眠り宣言をする。

「自習なんですから、少しは勉強したらどうですか？」

「ん…。課題は出てるか？」

「出てます。プリント3枚だけですけど…。これを今日中にやれ
って。」

美穂に言われたため、課題だけはやろうと思ったのか、課題はあるか聞く。

「教科は？」

「全部数学です。」

「数学か…。ちゃっちゃと終わらして寝るか…。」

「…結局寝るんですね…。」

教科を聞き、終わらせたあとやはり寝る気らしく、美穂はため息をつく。

「…よし、終わった。」

「え?! もう終わったんですか?!」

始めて3分程でもう終わったらしく、寝る体制に入る。

「あれ？緑野くん？寝るなら課題終わらせてから…。」

「…もう終わってます。」

「え？…ホントだ…。」

愛子が魁人が寝ようとしているのに気づき、声をかけると美穂が魁人のプリントを見せる。

「本気でしたらこんなもんだ…。基本の確認程度だったしな…。」

「だって言っても…。代表でもこんなに早く終わらないよ…。」

愛子が翔子の方を見ると、翔子でもまだ1枚目がやっと終わるところだった。

「本当に人間かどうか疑っちゃうよ…。」

「…ですよね…。」

愛子と美穂はため息をついて魁人を見るともう眠りにおちていた。

「でも、緑野くんって寝顔かわいいよね♪こうしてると女の子みたい♪」

「え？！／／…そ、そうですね…／／／」

愛子が魁人の寝顔を見てそう言うと、美穂もそれを見て顔を赤く

する。

「ん？その反応…。なるほどねえ」

「な、なんですか?!」

「いゝや、なんでもないよ」じゃあボクは戻るねえ」

愛子はおもしろいものを見つけた、というふうに笑うと、自分の席に戻っていった。

「もう…。さて、私も課題を終わらせないと…／＼／」

美穂は課題を終わらせようとするが、魁人の寝顔が気になるらしく、なかなか進まなかった…。

「…ん、ふわぁぁ、もうこんな時間か…。」

魁人が起きるともう下校時刻らしく、何人が帰る生徒が出てきていた。もうプリントも回収されたらしい。

「あ、起きましたか？」

「ん、美穂か。お前はまだ帰らないのか？」

魁人が起きたのに気づき、美穂は魁人に声をかける。

「はい…。あの、よかったら、なんですけど…。」

「ん？どうした？」

美穂は何か頼み？があるらしく、魁人に言う。

「…一緒に帰りませんか？」

美穂は顔を赤くしつつ、そう魁人に言う。

「ん、別にいいぞ。保育園からの付き合いなんだから、そんな遠慮することないだろ。」

ただ、魁人は友達感覚で言っていると思うているらしく、そう答える。

「そうですね…。はあ…。」

美穂は魁人が自分をただの幼馴染だと思っていると思うたらしく、ため息をつく。

「ちょっと緑野くん。そういう態度は感心しないなあ。」

「ん？工藤さんか。どういうことだ？」

そこへ愛子が声をかけてきた。

「どういうって…。魁人くん、美穂ちゃんが幼馴染だからっていうただそれだけの理由で誘ったと思ってるの？」

「ああ。他にどんな理由がある？」

「はあ…。これは思ってた以上に強敵だね…。頑張ってね…。」

「はい…。わかってましたから…。」

愛子は魁人の返答に少し呆れ気味に言う。と教室を出て行った。

「？ なんなんだ？…まあいいか。美穂、帰るぞ。」

「あ、はい！」

魁人は意味がわからない、というように首をかしげると美穂に声をかけ先に教室をでていく。

美穂もかばんをもって、すぐ後を追いかけていった。

第3話 自習って寝るための時間でしょ？（後書き）

タグで主×優子とか書いという全然優子が出せない…。

つ、次は出せると思います！

次も読んで下さると嬉しいです！

それでは！ お読み頂き、ありがとうございました！

第4話 下校中って何か起こる確率高いよね。

「しかし、今日の魁人くんの課題の早さには驚きました…。」

「まあな。1年の頃を知ってるやつなら皆そう言うだろう。」

只今、下校中。

「でも、美穂は俺のことよく知ってるんだから、そんなに驚くことでもないだろ。」

「あそこまで早いとは思いませんよ…。試験で数学何点だったんですか？」

「忘れた。腕輪は余裕でとれてたけどな。」

「…400点が余裕って時点でおかしいと思うんですけど…」

「そうか？…ん？」

魁人は何か見つけたようで歩くのをやめる。

「どうかしましたか？」

「…悪いけど先に帰っててもらえるか？」

「え？」

「明日に繰り越して…。」

「まあ…。いいですけど…。それじゃ、また明日。」

「ああ、悪いな。」

魁人は美穂を先に帰すと、改めて「何か」の方を見る。

「…やっぱ、人助けはしとくべきだよな。」

魁人は走って「何か」…。助けるべきと判断した所へ向かう。

「なあ、ちょっとだけだつて。一緒に楽しいことしようぜ?」

「嫌だつて言ってるでしょ!」

「ちつ、しょうがねえ、力づくでいくか…。」

「え? ちょ、ちょっと…。」

チンピラ風の男達3人がある女子1人を囲み、迫っていく…。

「…ったく。そんなことしてて恥ずかしくねえのか?」

「ああ？…ぐあつ！！」

「おい、どうした…ぐつ？！」

チンピラの1人が手を伸ばしたとき、不意に鈍い音が響き、その男は倒れた。

更に次の瞬間には、もう1人、地に倒れていた。

…そこには黒の木刀を持った男子が立っていた。

「な、なんだお前は？！」

「ああ？てめえらごときに名乗る名前なんざねえな。俺に勝てたら教えてやるぜ？」

「てめえ、なめやがつて！！」

「…屑が。」

そう呟いた瞬間、最後のチンピラは倒れていた。

「…怪我はないか？」

「え、ええ。大丈夫。ありがとう。」

「それはよかった。」

ガヤガヤ…

「おい、あの黒刀、もしかして…。」

「ああ、あの強さ…。」

「あの悪鬼羅刹と互角にやりあったっていう…。」

この戦い（リンチ？）を見ていた人々は男子の正体に心当たりがあるらしく、口々に呟いている。

「おっと、目立ちすぎだな…。じゃあな！」

そういつて男子は笑顔を残し去っていった。

それを見た助けられた女子は

「…かっこいい／＼／」

と顔を赤くしていた。

「つたく、また目立つちまったな…。」

「よう魁人。また噂されるようになったな。」

「…茶化すなよ、雄二。」

「まったく、困った人を放っておけないってのは不便だなあ？」

「…まったくだよ。お前との一件のせいで、もう目立ちたくない
って思ってたんだがな…。」

翌日。

「おはよう。」

魁人は教室に入る。

「おはようございます。」

「おはよう、緑野くん。」

「やあ、緑野くん。」

美穂、愛子、久保がいさつをかえず。

「緑野くん、今日も眠そうだね。」

「いくら寝ても眠気がとれなくなてな…。」

他愛もない話をしていると、魁人の後ろからもう1人入ってきた。

「あ、優子。おはよう。」

「愛子、おはよう……ああ！？あなたは?!」

「ん？」

入ってきた女子は魁人を指差すと急に大声をあげた。

「ああ、お前は昨日の…。」

「え？何、魁人くん、優子と知り合いだったの？」

「ああ、昨日、ちょっとな。」

入ってきた女子は昨日魁人が助けた女子…「木下 優子」だった。

「あ、あの。昨日はありがとう。」

「大したことはしてないさ。あの後、大丈夫だったか？」

「ええ。心配してくれてありがとう。」

「昨日…？昨日、私と別れた後ですか？」

「ああ、そうだ。木下さんがチンピラにからまれてたんでな。助けた。」

「だから私を先に帰したんですね。」

「ああ、危ない目にあわせたくなかったからな。」

優子は昨日のことでお礼を言い、魁人は昨日あったことを説明した。

「でも、何か意外だな。緑野くんが人助けというか…。そういうことに首をつっこむのは。」

「困ってる人は放っておけない性分だな。女子なら尚更だろ。」

久保が少し意外だと言うと、魁人は困っている人は放っておけない性分だと言う。

「でも、なんかかつこいいよね、そういうの。優子も惚れちゃったんじゃない？」

愛子がふざけて言う。しかし優子は

「な、何言ってるのよ？！／／／そんな訳ないでしょ？！／／／」

と、明らかに焦ってしまっている。

「…冗談だったんだけどなあ…。へえ、まさか優子がねえ…。」

愛子は簡単に見抜いたが、魁人は

「本当だよ。俺が女子にもてる訳ないだろう？」

と的外れなことを言っている。

「しかも木下さんみたいなかawaii人が俺に惚れる訳ないだろうが。」

「なっ?! / / / / /」

優子は顔を文字どおり真っ赤にする。

「…鈍感で、しかも天然かい？」

「ホント、罪だよねえ…。」

魁人の発言に久保と愛子は苦笑いしている。

「…まさか、優子さんが…。」

その中で、美穂は1人で何か呟いていた…。

第4話 下校中って何か起こる確率高いよね。(後書き)

紫苑さん、コメントありがとうございます！

やっとう子出せました…。

…優子ってこんなキャラだっけ？w

正直、今回の話は自分であまり納得がいつてません。

優子の話の件の流れが無理矢理すぎるかな？ちよっとおかしい思っています。

まあ、自分の文才がないのを恨むしかないんですが…。

そついうことなんでいつかちょっと手直しするかもしれません。

次回も読んで頂けると嬉しいです！

お読み頂きありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7700y/>

バカと居眠りとAクラス

2011年11月24日22時50分発行